令和４年度　第１回芦屋市立美術博物館協議会　会議録

日　　時	令和４年８月２３日（火）１５：００～１７：００
場　　所	芦屋市立美術博物館　エントランス・ホール　歴史資料展示室
出　席　者	会　長　藪田　貫 副会長　岡　泰正 委　員　飯尾　由貴子 委　員　若林　敬子 委　員　安部　太一郎 委　員　星野　剛一 欠　席　者　委　員　中島　幸夫 委　員　山下　綾子 （芦屋市立美術博物館指定管理者） 館　長　石井　茂（株式会社小学館集英社プロダクション） 学芸員　室井　康平（株式会社小学館集英社プロダクション） 株式会社小学館集英社プロダクション　岩川　晋子 グローバルコミュニティ株式会社　渋谷　真幸 グローバルコミュニティ株式会社　鈴木　裕也 （事務局） 社会教育部長　茶嶋　奈美 生涯学習課長　岩本　和加子 生涯学習課文化財係長　竹村　忠洋 生涯学習課文化財学芸員　森山　由香里 生涯学習課文化財係員　田代　隼人 生涯学習課文化財係員　松本　淳子
事　務　局	生涯学習課
会議の公開	■　公開
傍聴者数	０　人

１　会議次第

（１）　開会

　１）社会教育部長あいさつ

　２）会議の成立及び公開の確認、資料確認等

（２）　報告

　１）　令和３年度事業報告について

２）その他
（３）議題
１）歴史資料展示室の展示内容の充実について
２）その他
（４）閉会

２　提出資料
会議次第
委員名簿
資料１　芦屋市立美術博物館運営基本方針
資料２　市立美術博物館　歴史資料展示リニューアルに関するアンケート
資料３　歴史資料展示室常設展示について小・中学校の教諭から聞き取った内容
資料４　歴史資料展示室の展示の充実について（概要）
資料５　常設展示構想（案）
資料６　常設展示レイアウト（案）
資料７　芦屋市立美術博物館２０２１年度事業報告書

３　審議内容
（藪田会長）
それでは、議事次第に従いまして進めさせていただきます。
ではまず、（２）報告が１）令和３年度事業報告についてと、２）その他とございますので、事務局よろしくお願いいたします。

（事務局：岩本）
まず、１）令和３年度事業報告につきまして、石井館長から報告させていただきます。

（石井館長）
……〈令和３年度事業報告の説明〉……資料７

（事務局：岩本）
２）「その他」についても、ご報告させていただきます。
美術博物館の現在の改修工事の状況ですが、７月１日から休館しており、来年３月末までが工事期間、４月上旬に再開館の予定です。
現在、工事はまだ着工していませんが、今は、契約業者が資材の調達を行っている状況です。本格的な工事着工は秋以降になる予定です。
休館中は、SNS などを活用しましたコラムなどの情報発信や、広報誌で「あしや芸術さんぽ」という芦屋の風景と、現在の風景を紹介するコラムを連載するという取り組みを進めています。現在の状況は以上です。

（藪田会長）
それでは、ただ今の令和３年度の事業報告についてご意見等ありましたら。いかがでしょうか。

（星野委員）
美術部門の方が、子ども目線の写生を行ったり、音楽会を行ったりされたのが良かったと思いました。中でも印象に残ったのは、北原照久コレクション展は歴史担当の学芸員さんが開いた展示ですけれども、その中のポスターを使って美術の学芸員さんがギャラリートークをされたということで、両部門をまたぐ動きをされたのが、美術博物館ならではの動きですし、面白いと思いました。美術と歴史のコラボレーションが進んで、これから楽しみだと思いました。

（安部委員）
私も、北原照久コレクション展を家族で見に行きました。
昔のポスターであったり、おもちゃであったり、今の子ども達には、今と違う新鮮さがあったと思います。実際に私の子ども達も、「昔のおもちゃってこんなんやったんや」と、違う受け取り方をしているのもありました。
来館者の観察をしていたのですが、会場に来ている子ども達も、ガラスケースにむかって見入っていました。以前の会議で「動かせるおもちゃを動かした方がいいのでは」という意見が出ていましたが、会場では動いていなかったのですが、QR コードがついていて、スマホをかざすと北原氏が解説している YouTube で、その動きが見られるおもちゃがありました。そこがよかったです。
残念だと思ったところは、ギューッと押し固められているような展示があったことです。
老朽化等で展示台が少なくなっているということは会議で聞いていたので、仕方ないかなと思いましたが、せっかくたくさん展示物（おもちゃ）があったので、ギューッと固められているのはちょっと残念だったと思います。
本校の子ども達も、何人か見に行っていましたが、「寄って立ってた。」とか、「ぎゅっとなっていた。」と、子どもの口から見えづらいということを言っていました。そういうところは、展示の仕方という面で、改善点があったのかなと思います。
美術と歴史のコラボという話も出たのですが、私は学芸員さんに本校へ来ていただいて、授業をすることを考えています。美術の学芸員さんに休館中、来ていただいてワークショップを進めていこうという話をしているのですが、歴史の方も、「こういう土器があるよ」とアピールしていただいて、休館中だからこそ、学校等に足を運んでもらって、三条文化財整理事務所ならこんなものが見られるとか、美術博物館に行けばこんなものが見られるとか、アピールをどんどんしてもらった方がいいと考えています。
実際に山手小学校の児童は、５月か６月に学芸員さんにお越しいただいたときに、「美術博物館に行ったことある人？」　「知っている人？」と聞かれたのですが、その時にあまり手が挙がらなかったのです。３年生の市内巡りで隣の図書館は行っているのです。学芸員さんも美術博物館の印象はまだまだ薄いと仰っていました。
それで、学芸員さんには、学校側にチラシを持って来ていただくだけではなくて、直接学校に来て美術と歴史をアピールしていただければ、これからもっと授業という形でできるのかなと思いました。以上です。

（藪田会長）
若林委員どうぞ。

（若林委員）
今年の夏休みは休館中で、従来であれば、一番小学生、中学生が来館する期間ですけれども、ちょっと残念でした。さきほど、安部先生が言われたように、もっと学校とコラボしたり、リンクしたりする活動をこれから進められたら、もっとこの館の認識度が上がるでしょうし、子ども達の中で美術博物館への認識が高まるのではないかと思います。
いろいろな美術展に連れて行かれるというようなご家庭が結構多いように聞きますが、学校中心にされると、注目度が集まるのではないかと感じました。
北原照久コレクション展で、私どものNPO法人が５月１５日に美術博物館のピアノ（ベーゼンドルファー）を皆さんに弾いていただこうと企画しました。午前と午後、かなり盛況で、皆さん、いろいろな手法で弾いてくださいました。本当にやってよかったと思いました。ここに足を運んでいただく、そして、ピアノ（ベーゼンドルファー）が芦屋市立美術博物館にあるんだ、ということを皆さんにPR出来ました。できたら恒例にしていきたいと思っています。
とにかく、ここへ足を運んでいただくということが、まず大事なことでないかなと思います。

（藪田会長）
今年度の春の展示の話ですね。飯尾委員どうぞ。

（飯尾委員）
先ほど伺ったピアノの話ですが、コンサートの担当者が聴きに行かせていただいて、非常に良かったということで、うちもやってみようかということになりました。また教えていただければと思います。
それから、学校の団体がたくさん来られていますが、美術館にとっては、一番重要なお客さんの層なので、これからも、習慣的に来られるような仕組みを考えていかれれば良いと思います。
昨年度の感想ですが、展覧会の構成などもバランスよく、スポーツをテーマにした新規のものもありますし、美術博物館のコレクションを生かしたもの、作家の個展などもあり、充実した内容でした。また、歴史ある芦屋市展も続けて開催しているということに敬意を表したいと思います。公募展の高齢化については、私達も同じ問題を抱えておりまして、若い人にどうやって出品してもらえるかが課題です。私どもの場合は、奨励賞という 40 歳未満の人に賞を贈るということをして、出品奨励をしております。しかし、制作期間との関係で、やはり若い人は出品が難しいような状況になっておりますし、こちらの方もまた、アイディアなどを交換しながら教えていただければと思っています。教育系の事業も積極的に行われていて、それも参考にさせていただきます。以上です。

（藪田会長）
ありがとうございます。岡副会長どうぞ。

（岡副会長）
この美術博物館のお話は、非常に明確で、建物の中の展示をどうするかと、この建物へお客様にいかに多く来てもらうかという話です。
私は、芦屋市文化推進審議会の委員もしておりまして、そこで、質問がありました。それは、要

するに美術協会というか、美術連合というか、そういうものは、解散してずいぶん経つが、今後芦屋市はどうするのかという質問でした。会議の席では、そういうものを作る気は、もう、市役所的には無いという回答だったのですが、実際にそれは非常に明確なことで、つまり、文化というものは市民に任せるけれども、市役所的には、それに対して、人を付けたりとか場所を設けたりはしないということなのですね。そういうその空気感というか、その方針、施策というものが市全体の方向性としてあって、その流れの中で、美術博物館がどのように立ち位置を持つかということに対して、市の中で棲み分けがどのようになるかというのは、私自身もその会議に参加していて、すごいジレンマを感じました。若手の発表の場所となり、芸術的な実験をする場所であり、あるいは若い人がここでぜひ個展をしたいと思う、そういう場所を一つ作ってあげてもいいのかなと思いました。つまり、ギャラリーですね。この美術館はそういう現代美術の提供と、世話をする人の提供の場であると思うのですね。

それと、私はいつも思うのですけれども、ここに来るアクセスの問題。これは、わが小磯記念美術館もそうですが、一番大きな問題で、駅からどのように歩いたら一番効率よく、美術博物館に行けるかとか、美術博物館に向かっていくワクワク感とかを、どのように演出できるかとかいつも考えています。つまり、改修工事を行っても、建物の中だけでなく、外回りのことも考えてほしいと思うのです。

前にも、先生方が仰っていましたように、防潮堤に描いてある子ども達の絵も、あのままでいいのかということもありますし、どういうアクセスが美術博物館に向かって歩いていけるルートになるのかということを常に総合的に考えないといけないと思っています。これは市全体の会議で議論されているような問題と同じで、つまり、市長レベルで美術博物館の建物をバックアップしてくださる、その時に初めて、美術博物館がハレの場所としてのステータスがより上がって、はじめてそこに向かって、美術家が自分もそこで何かやってみたいという気持ちになれるんだと思います。

芸術文化会議みたいなものを誰かの諮問を受けて作るその場所は、まさにこの場所、この美術博物館ではないかと私は思いまして、もっと、積極的に生涯学習の中で、歴史的なことだけでなくて、現代アートや、伝統的なことも含めて、工芸的なものや打出焼があるから焼き物でもいい、何か市役所全体が総合的にバックアップできないかと考えています。

そして、高齢化は、ずっと言われていることでして、私は、いろんなところの公募展で、審査をしますが、年齢を聞くと、だいたい 60 歳代〜90 歳代です。だから、本当に市展は高齢者の発表の場所であって、高齢の方にご褒美をあげるという感じなのですけれども、なかには、他県の人もいて、ちょっと違うかと、思うこともあります。

つまりは市展に地元の人がいない、若い人もいない。そのことが仕方ないことではなくて、抜本的に美術博物館で何かできないかなと思うのですね。県展での奨励賞もそうですけれども、地元の人に投げかけて出品を促すとか、何かの手助けをしていく。今もそうですが、水を向ければしゃべってくれますが、みんな水をあげないと、発芽しないという時代になっているのかと思います。

芦屋市立美術博物館もよくやられていると思います。私がよく言っていますが、具体があって小出楢重がいる近代洋画というのも大切に置いといて、みんなモダンアートになったら、高齢者はわからなくなってしまいます。ずっと言われていることですが、美術館でやっているハイブリッドの先進的な展示、私はそれを応援していますけれども、それこそ、ルノワールやモディリアーニのような巨匠の口当たりのいい作品も、小出楢重のような近代洋画や福田眉仙のような日本画の展示も、バランスもお考えいただいた方が良いかと思いました。

学者は現代美術に対して、褒めてくれますけれども、それだけではなく、普通の洋画・日本画・

工芸等が見られるような場所であってほしいと私は思います。

（藪田会長）
芦屋市全体として、美術、芸術、文化、などどういう風に盛り上げていけるか、特に芦屋市行政から何かありますか。その辺について近況報告があればお願いします。

（事務局：岩本）
文化推進審議会の方で、文化芸術の部分を以前は教育委員会で所管しておりましたが、文化といいますと、街並みですとか、生活のあり方とか、またこういう美術ですとか、いろんなものを広く含めて文化芸術と呼ぶというところで、今は市長部局が所管しておりまして、審議会で議論をしているところでございます。
具体的に美術博物館を、「こういう方向性で」とか、「これまでこっちの方向性でしたが、これからはこっちの方向性で」等という明確なビジョンは出ているというわけではないのですが、今、岡副会長の方からご教示いただきました、そういう抜本的な思考の転換といいますか、これまで、「美術博物館がこういう展示をしますから来てください」というものでしたが、「市民の方が共にある美術博物館」といいますか、そういうことが求められてきている時代だと思っております。具体的にどこまでどうすれば良いのかというところまで持ち合わせていませんが、時代の流れというものを意識して、他市なり、先行しているところの事例を聞きながら、本市も何か出来るところから取り組んでいこうと思っているところです。

（岡副会長）
ここへ来る道として、一番きちっとしたルートというか、このルートが美術博物館へのアクセスの道ですというのがわかりませんでした。民家の間の道をうろうろと行ってたどり着くとか、バスを降りて美術博物館に着くとか…。そういうことは美術博物館がひとり努力してもダメでしょう。大局的にみながら、阪神芦屋駅からどのように歩けば分かり易く行けるかと、例えば、松林の道を通ると決めたら、そこを整備するとか。

（若林委員）
岡副会長、そういうことについては、何年も前からこの美術博物館協議会で提案させてもらっています。
私達NPO法人が、もう８年前になりますが、こちらの指定管理に応募させていただいて、いろんなことを提案させてもらいました。その時に阪神側から南に下りテニスコートの横を通って来る道を、今、先生がおっしゃったような道にと申し上げました。もっとワクワク感を誘うような、「美術博物館へのいざないの道」という演出をされてはいかがですか、ということを。今スマホで見られる、道標みたいなものを各所に設置するとかして、ゲーム感覚でこの美術博物館へ人をいざなう仕組みとか、土偶とかレプリカを、あの道に置いておくのはいかがでしょうか。それにつられてここまで人が来るというような、面白い仕掛けみたいなものをすればどうかなと考えています。
例えば、陶板など焼いたものを石畳の一つと取替えるとか、何か面白い仕組みができればと思います。お金がかかるでしょうけれども、新聞記事を見ますと、芦屋はちょっとお金が潤沢になってきたみたいですので、来年の予算に突っ込んでもらえたらと思いました。

（岡副会長）
大局的な話で、市長レベルの話です。駅からここまでの道が、アートプロムナードになれば一番いいので、昔の防潮堤をうまく使うかもしれないし、芸術家達が何かできないかとか、絵を描く、彫刻を置く等、それを、今、我々がアイディアを出すのではないのです。たどってくれば美術博物館に到達するのが当たり前というような道の整備がされてないことがずっと続いていて、ここが、孤立しているような気がして仕方がないです。他市から来た人が、どういうふうに感じるかを考えると、市長レベルでお考えいただければと思います。
改修は、いいチャンスなので、今のはなしは建物の外の問題になりますが、工夫ができないかなと思いました。

（藪田会長）
ありがとうございました。
今日の資料の中からみますと、アクセスの問題と、運営を頑張っておられるということがあるのですが、統計の中に、小中学校の子ども達は無料で何人利用とありますが、大人の場合は、市内と市外で分けて取っている統計はあるのですか。

（石井館長）
事業報告書の中にありませんが、それは、アンケート調査に書いてあります。いい時で来館者の３０パーセントぐらいが芦屋市民です。今は３０パーセントを超えることがない状況です。

（藪田会長）
市外への発信力というのがどういうものか、市外から来ていただくときにアクセスの問題があるなら、議論を進めていくためにアピール度というのを把握しておきたいと思います。
そういうことなので、今日出ているデータでは、その点が議論できません。課題と、年次報告で集計されるデータの間に整合性がないといけないです。今後、きちっと議論しておいた方がいいと思います。
そのために次年度集計するときには集計する視点を変えて集計してもらわないと、毎年毎年同じ集計の仕方だと年度ごとの変化はわかりますが、課題が達成されているかどうか見合う程度にならないです。2021 年度に、面白い展示をされたと思っているので、市外への発信力という点を考えてみたいと思っています。２月は小中学生が 2,000 人来られているのです。これは学校のプログラムときちんと連携していると私は思いました。そういうような読み取り方をするのですが、例えば、兵庫県立考古博物館などは、４月・５月多いのです。そこに学校を入れておられるのでしょう。学校のどの時期に動員していくか、おそらく考古博物館の方は、最初にしておこうと４月・５月で、芦屋市立美術博物館の２月は「昔のくらし」の単元の関わりだと思います。そういう意味で、学校連携というのが、タイプによって違います。あとは、美術系であれば、どの時期が多いのか、美術系として多いといえるのか、そういう役割分担、あるいは、歴史と美術の展示の全体としての営みとしては、どういう時期にどういう山があると営みとして普通であるかという形が見えてくるので、リニューアルから先のことを考えた時には、我々が知りたいデータをみるための表を作るということにしておかないといけません。この表は、ある意味、ニュートラルの表だと思うのです。ここか

ら、次の課題を見つけるデータづくりをしなくてはいけないのです。すると、美術博物館が、この場所にあるという課題とかも、はっきりとデータ化して示せるのではないかと思います。

今後、このデータはこういうことを議論していただくために用意しました、というようにメタデータと合わせて議論のためのデータも用意してください。

それでは、次の議題に。先ほども出ていましたが、「歴史と美術のコラボ」というのはとても大事なところですので、念頭に置きながら、（１）のところに進めたいと思います。では、事務局から、説明をお願いします。

（事務局：岩本）

市民文化振興基金を財源にして使わせていただく事業です。基金を使い市民の満足度向上の為に歴史資料展示室のリニューアルを行います。事業規模は、歴史資料展示室、前庭のイス、パラソル等老朽化しているものの更新も含めて 430 万円の予定です。皆様のアイディアを活用させていただき、魅力ある展示になるように見せ方の工夫など、ご意見をいただきたいと考えています。事務局竹村と森山より説明します。

（事務局：竹村）

……〈歴史資料展示室の展示内容の充実について資料で説明〉……資料１～資料５

（事務局：森山）

……〈歴史資料展示室に移動して、説明〉……資料６

（藪田会長）

資料並びに歴史資料展示室を見ながら説明を聴きました。安部委員、小学校の立場からご意見をどうぞ。

（安部委員）

小学校では、1 学期に３年生が市内巡り等で来るのですが、そこで終わってしまったのでは、もったいないと思います。一回来て、「よかったなあ」とか、何か体験できて、「楽しかったなあ」とか、そのような思いを持って家に帰る。帰って、またおうちの人と「あんなん展示していたからまた、見に行こう」となります。美術の方もそうですけれども、何回も来たくなる展示って、とても大事だと思います。

展示案について説明がありましたが、まず、入口のところが目立ちにくいと思います。階段から入口が見えるという話がありましたが、そうではなくて、1 階から見えるようにする工夫が大事だと考えます。子どもの目線は結構低いので、体験できるものを外に持ってきて、子どもから見えるようにしておいて、「ここでも使えるよ」とか、比較的大丈夫そうなものや、展示で動かせそうなものをそこに置いていたら、子ども達は見つけると思います。そこで、「動かしてみる」すると、「ここにこんな部屋があると、部屋を見つける。入る。」という感じで、なるべく動線をたくさん子ども達が見つけるように、あるいは、見に来られたいろんな方の動線をばらまいておくというのはとても大事なことだと思います。

また、ワークショップやワークシートなど、いろんな話がありましたけれど、数か月前にぼくも

来させてもらって、ワークシートを取りに行きました。見ると、内容が難しいから、子どもは取っただけで終わっちゃうのです。その中にクイズ形式であったりとか、ルビをふるなど、工夫が欲しいです。例えば、この説明を見ても、難しい漢字がたくさんあるので、写真で見て、なんとなくわかるのですけれども、ポイントとなるところは、小学３年生はほとんど読めないです。なので、ルビは、大きめにしっかりふって欲しいです。また、ワークシートに書き込むところは、ちょっと枠を大きく作ってもらわないと記入しづらいです。そこまで、考えてもらったらありがたいです。子ども達はすごく吸収するので、その材料がたくさんあれば、どんどん吸収して帰って、おうちでも話をして、「家族でまた行こうか」につながっていけると思います。

学校で行くのは、３月に１回ぐらいですが、それで終わってしまわないような展示や企画展みたいなものも、大事だと思います。芦屋には打出の小槌のような昔話があったり、ぬえという妖怪がいるとか、子ども達が好きそうな昔話もありますし、だんじりのお祭りなどもあるので、芦屋の子どもの興味があるものを企画展に季節ごとに入れれば、「家族でまた行こう」ということになるので、いろんなところからアピールして展示に結び付けていけばいいと思います。

（藪田会長）

星野委員どうぞ。

（星野委員）

市立伊丹ミュージアムの歴史展示室も美術博物館の歴史資料展示室と同様に、入口がわかりにくいですが、入り口の前に大型土器の露出展示をしているので、それを見ているとつられて自然と歴史展示室に入ってしまうというような工夫をしています。美術博物館も、もっと意識して歴史資料展示室への誘導を工夫された方が良いと思いました。子どもにワクワク感、ドキドキ感を与えるという意味では、見聞きするだけでなく、五感にふれたりさわったり出来る体験学習の場を設けて欲しいと思いました。伊丹ミュージアムでは、ボランティアの協力を得て種々の体験学習とかワークショップのお手伝いをして貰っており、ボランティアと子どもとの対話は、市民交流にも繋がっていると思います。今後の運用面の話になるかも知れませんが、今回の歴史資料展示室の改装を契機に、美術博物館も伊丹ミュージアムみたいに文化財ボランティアの活用を検討して欲しいと思います。

（藪田会長）

ありがとうございます。飯尾委員お願いします。

（飯尾委員）

以前の協議会で藪田会長が言われた「歴史というものは、土地の記憶で、土地に堆積されていくもの」という言葉がとても印象に残っておりまして、地図と、写真と実物をうまく組み合わせてするのが効果的ではないかと思っております。写真というものも、静止画像ではなく、今や映像、スライドショーでいいので、古い写真を映し出していくとか、子ども達が見ていて飽きないような工夫、映像が難しければ古い写真をスライドショーにして見せるとか、映像を活用すると、狭い空間でも、かなり効果的に伝えられるかなと思いました。また、地図というのは非常に大事で、地図の展示とおっしゃいましたけれども、古地図から現代の地図まで、床に上からプロジェクターで地図

を映し出してみせるとかどうでしょうか。この展示室も、学芸員の立場から見ると、一見展示しにくそうな形ですが、拝見していると、なんか芦屋市の形に見えてきて、床を芦屋市の地図にして、そこに、「ここ」という風にすると、子ども達は、ここに住んでいるとわかるので、土地の実感を感じられますし、その場所に積み重なっている歴史をスライドショーで見せるとか、場所がなければ、バナーとかスクリーンで流すとか、写真とか、映像とかスライドショーとかを活用して展示をすると、それがまた実物と結びついていくので、深い印象になるかなと思いました。

それから、入口のところも、これからサインの計画をされると思うのですが、遠慮されている気がして、美術スタッフと喧嘩するつもりで、ここは歴史だと、天井から大きなバナーを吊るすなど、もっとアピールされてはどうかなと思いました。

先日に行きました、神戸市立博物館の歴史の展示室が非常に面白く、模型と、スライドショーによる昔の神戸市の映像がリンクされていてわかりやすかったので参考にされてはどうかと思いました。

（藪田会長）

ありがとうございました。

（岡副会長）

私は展示室の現状を見て、古代エジプト展をここでやるんだという考えでないと、いけないかなと思いました。エジプト展は、指輪とか、壷とか、屋外にはレプリカ的なもので、まず、入口に導入して、古代エジプト的なことをする。そうすると、今の方向性としては、全体を暗くします。そして、金の指輪をスポットであてます。すると、そこだけ明るくあとは暗い状態、そこで、ビジュアルが働く状態になります。お金がかかるのですが、常設展でやれることは、特別展でやるぐらいのお金を付けないといけないと思うのです。プロの方が図面を描かないと、素人の考える展示はこれまでと同じままなので好奇心をくすぐるような展示にはならないのです。

展示室を暗くして、暗いエジプト展的にする。中に入って同じ空間でも、そこにスポットがありますので、区切られた空間になり、全然違ってくるのです。ここで、特別展をするのだよと。それが常設化に応用するのです。神戸市立博物館は、基本的にはそれと同じなのです。演出＝メリハリを考えたのです。今までのケース展示をやめてね。そうするとここを強調したいんだと表現できます。そこでもし変えるとするなら、陳列替えをすると。だから、大きな壷があって、絵図があるとか、絵図のところだけを強調して、取捨選択して、これを強調するんだと。

そのほかにも、展示ケース外にその時代の人のパネルを切り取って立てるとかどうでしょうか。そして、その人が紹介をしていくとか。このフロアをうまく使えば、ケース中じゃなくてね。それで、案内している人がいるとか、お金持ち風の紳士がいるとか、どこかから切り取って、等身大パネルにして、その人が案内しているようにするとか。一緒に写真撮っても構わないし。ちょっとキャラクター的なものを、どんどん押していけばいいし、阪神間モダニズムの中から出てきたキャラクター的なおしゃれな女の子がいるとか、そういうところでぬき出してきて、外に出していく。今までにないものを出したら、子ども達はワーッというし、大人たちも、それを見て面白いなと。何か変えましたという、工夫をしましたと。で、これは、特別展なんだから古代エジプト展みたいに暗い展示で、宝石を見せよう、金を見せようという演出も考える。素人では、どうしても、我々意見を言うけれども、ビジュアルにしてくださるのはプロなのですよ。お金のないところでどのよう

にひねり出すかというところで。これは伝えたいということをお互いにすり合わせていくのです。高価なものはお金がかかるし、古くなるし、使い続けると故障するのです。で、故障すると、電気屋を呼ぶしかないが、直ぐに直らないので故障中の張り紙になる、だから電気物は多用せずよく考えないといけないのです。過熱もするし。ただ、何箇所かはそんなのがあって、バナーに映すような話とかも良いです。今はだいぶん機器がよくなっているので、耐久性のあるものになっているので、少しは入れていかないといけないかなと、思います。

周りが全部新しくなって、開館当時の古い模型等、古いものがあったらやっぱりおかしい。ただ、神戸市立博物館でも、居留地時代の建物の模型とかあってそれは使いました。それは、反対に今は作ると値段が高くて作れないので生かそうと思いました。だからガラスケースのガラスを取って資料として展示しようとしたのです。

光の演出を考えられる方がいいです。子ども達はゴージャスなものを見れば、高そうとか、すごいというイメージを持ちます。

それと、芦屋の邸宅文化。ここにわざわざ来た人の好奇心をくすぐるもの、すなわち芦屋の文化を象徴するもの等、見てひれ伏すぐらい高価で凄いものがいい。

私的に言えば、出島資料館では、大きな伊万里の壷を一対買ってもらって入口にスポットをあてて置いています。壷で、ステイタスイメージを作って展示室に入ってもらうようにしました。

芦屋市立美術博物館も、象徴的なもので代弁するものができればと思っています。

この、打出小槌古墳出土の人物埴輪など、そこだけ強調して、うまくいけばキャラクターになると思います。あと、常設展示ですので変えなくてもいいし。そんなことを思いました。

（藪田会長）

では、事務局どうぞ。

（事務局：岩本）

今、皆様から大変貴重な意見をいただきまして、ありがとうございます。

光の演出という部分についても、ここの歴史資料展示室はトーン暗めですので、そこをどう生かしていくのか、と思っていたところでしたので、光の演出というところを、どう取り入れられるかというところを考えたいと思います。

（岡副会長）

LED スポットをつけるしかないですよ。

（事務局：岩本）

はい。工事の中で更新していく部分もあるのですけれども、特に見せ方の部分で何か工夫ができないかというところは検討させていただきたいと思いました。

触る展示については黒電話をお子さんに触っていただけるように、畳を敷いて、道具を触ってもらうみたいなことがしたいなと思っております。後ろの棚には昔のおもちゃを並べて、親子で会話が生まれる場所にするなど、検討しているところです。触ってみるところは土器の破片も考えています。

場所をアピールするために、入口に大きなタペストリーも加えて展示したいと考えています。

（藪田会長）

仕切りを作るより、エントランスホール全体をどう使うかという発想でいけば、歴史が外に増殖していってもいいし、逆に美術館として使われる時には、歴史が撤退してきてもいいと思います。そういう融通を使われたらいいと思います。やはり、導入がないとここになかなか来ないです。

歴史は、２つ見方があると思います。

ひとつは、「学校の先生と見る。」もうひとつは「おじいちゃん、おばあちゃんと見る。」

今回「おじいちゃん、おばあちゃんと見る。」のアンケートがないのですよ。例えば「学校の先生と見る。」と、学校の先生はナショナルヒストリーとして教えるのです。その見方で戦争の話を教えるのです。「おじいちゃん、おばあちゃんと見る。」では、戦争の見方は、全く違うのです。そのように、見方には二つあるはずなので、同じ組立てをした場合でも、学校の先生と見た時の感動の仕方と、おじいちゃん、おばあちゃんと見た時の感動の仕方とがあると思うのですね。その辺はよく考えておかないと、それによって物を変えるわけにはいかないから。

このガラスケースはものすごく奥が深いので、屏風ぐらい置いて展示するにはいいけど、後ろに小さなシールを貼られても見えないのです。これはとっても難しいと思います。本来はこの半分ぐらいの奥行でもいいくらいだと思います。

それから、企画展もやってほしいと思います。いかに優れた常設展を作っても、飽きてくるし、説明できないところがいっぱいあるので、その部分は企画展という形で、変化を持たせるということも大事です。だから、一個作ったら終わりじゃなくって、常にそれの足りないところを補うために企画展をやっていくということがとても大事です。

（藪田会長）

では、これで本日の協議事項がすべて終わりましたので、閉会とさせていただきます。ご苦労さまでした。